

はじめに

初めて近藤教授にお会いしに東工大に行った日を、今でも覚えています。

近藤教授は当時、2011年に設置された情報生命博士教育院という、情報生命分野において活躍するグローバルリーダーを育成する教育組織に携わっておられました。「異文化コミュニケーション・ワーキンググループ」の委員長として英語コミュニケーション能力を強化する講義を開設する準備をしていた教授は、私にこう仰いました。

「東工大の学生はとても頭がいい。世界にも通じる頭脳をもち、すばらしい研究をしています。でもそれを伝えるのが下手なのです！せっかく国際学会に行っても十分に成果を伝え、ディスカッションができないで帰って来ることが多いのです！ぜひ彼らが、英語を知識ではなく、コミュニケーションの道具として修得できるようなコース作りに協力してほしい。」

なるほど、日本人の学生は英語が得意ではないから、研究を発表したり、他の研究者と議論したりできないのか。東工大非常勤講師に着任し、英語コミュニケーションの教科書を作り、講義内容を編集し始めた当初の私の考えはこのようなシンプルなものでした。

私は日本人と台湾人のハーフで、幼い頃にインターナショナルスクールに入学しました。6歳まで英語が全く話せませんでした。言語もそうですが、内気な性格も災いして周りとコミュニケーションを取れませんでした。物心はとっくについていたので、非常につらかったのをハッキリ覚えています。

つまりその体験が功を奏し、英語がネイティブルーレベルに至り、クラスメイトとの言語レベルの隔たりを埋めるまでどのように立ち回ったかを全て記憶しているのです。そうだ、東工大の学生には自分がギャップを埋めたノウハウを教え、臆することなく英語でコミュニケーションを取る方法を訓練してもらおう。講義内容と教科書はこのような考え方を基に編集されました。

90分間のディスカッションベースの講義の第一回目が終わって、事務の方が受講生に問い合わせたそうです。

「どうだった？」

「こんなに人と喋ったのは生まれて初めてです。」

なんと、英語でたくさん喋ったということ以前に、母国語の日本語も含め、人とこんなにコミュニケーションを取ったこと自体が初めてだったと言うのです。

一学期の講義が終わる頃には、最初はクラスメイトと目を合わせることもできなかつたシャイな学生達が、自らイニシアチブを取り白熱したディスカッションを、しかも英語で繰り広げている風景がありました。

文法を間違えることもあります。それでも意思は通じるのです。通じない場合もあります。すると、聞き手がもう一度説明するよう頼みます。別の方法で説明します。そして、通じます。

これは、どの言語の会話でも当然起こることです。それを学生達は当たり前のように出来るようになったのです。そこで私は初めて理解しました。英語の得手不得手なんて関係ない。コミュニケーション能力と言語能力とは、イコールではないのだと。

本書はこの東工大での講義をふまえて、1人でも学べるように新たに作成したものです。テツヤを中心としたストーリー仕立てで、初步的な英語表現（特にさまざまな場面を無難に切り抜けるのに役立つ表現）を楽しく学べるようになっています。読者の英語力を問わず、国際学会で英語力の違いをものともせず、しっかり意思を伝えるために必要な表現が網羅されています。

本書を使い、何度も練習し、場数を踏むことにより、読者が国際学会へ行くのが100%楽しみになることを望んでいます。

著者を代表して
Kyota Ko